

インターンシップ等参加によるコンピテンシーの変化

ー参加グループによる比較ー

Changes in Competencies Resulting from Participation in Internships and Similar Programs

ー Comparison by Participating Groups ー

○五十嵐 賢次^{※1} 徳重 充^{※1} 池田 英俊^{※1} 久保田 真敏^{※1} 伊藤 建一^{※1}
Kenji IGARASHI Mitsuru TOKUSHIGE Hidetoshi IKEDA Masatoshi KUBOTA Kenichi ITOU

キーワード：インターンシップ、PROG テスト、コンピテンシー、p 値

Keywords: Internship, PROG test, Competency, p-value

1. はじめに

新潟工科大学では、3 年次の夏期休業中に原則 2 週間のインターンシップを正課目としてカリキュラムに取り入れている。これは選択科目であるが、これから就職活動を控える学生にとっては貴重な経験である。

インターンシップに参加することによって、学生には社会性が身に付くと考えられるが、それを検証するために 3 年後期に実施する PROG テストの特にコンピテンシーについて比較するものである。昨年度¹⁾も学年全体で比較したのだが、今年度は他の活動も含めてコンピテンシーの変化を報告する。

2. 方法

新潟工科大学の現 4 年生で、1 年入学時と 3 年後期の両方で PROG テストを受けた学生は 108 名である。工学科は機械システム学系、電子情報学系、食品・環境化学系、建築都市学系の 4 学系に分かれ、各学系は定員を設けていないため学生は自由にこれを選んでいく。各学系の人数と、インターンシップの参加の有無は図 1 に示す通りである。

PROG テストのコンピテンシーは両側選択形式で行い、3 分類 9 項目からなる。具体的には“対人基礎力”として親和力・協働力・統率力，“対自己基礎力”として感情制御力・自信創出力・行動持続力，“対課題基礎

力”として課題発見力・計画立案力・実践力である。表 1 にこれらの参加グループ毎の結果を示す。

対象は学年全体とインターンシップ参加者と不参加者。それに加えてインターンシップ参加者の中から 1・2 年次の夏期休業中に“地域産業探究”なる短期就業体験に参加した者。学内イベントの企画運営や、オープンキャンパス実行委員会からなる学友会参加者である。これら 5 つのグループ群で数値を検証する。

各項目は 2 段構成で、上段に 1 年次、下段に 3 年次の結果を示してその変化を分かり易くした。なおこれら数値は 7 段階評価で各グループ人数の平均値を示し、右端には総平均として 9 項目の平均値を示した。

3. 結果および考察

3 年次時点での総平均は全体で 3.21、インタ参加は 3.20、インタ不参加は 3.23 とそれ程大差はない。在学中の経験は人それぞれではあるが、それなりの母数が大きくなると均されてインタ参加グループ高いとは言えないことが分かる。但し、インターンシップ参加者からインタ+地域は 3.57、インタ+学友は 4.31 を高い数値を示した。

また 1 年次時点の総平均は全体で 3.11、インタ参加は 3.05、インタ不参加で 3.33 である。意外とインタ不参加グループでやや高い数値を示した。またインタ+地域は 3.04 であるが、インタ+学友は 3.68 と異常に高い。大学入学直後なので個人の資質や高校時代の経験値が反映されていると想定できる。学友会やオープンキャンパスに参加するなど、通年して活発に動く学生達であるが、元々その様な素質を持ったグループであることが分かる。

1 年次から 3 年次の変化量を図 2 に示す。ここでは全 9 項目での各変化は“対人基礎力”，“対自己基礎力”，“対課題基礎力”で各 3 項目をまとめた平均と、9 項目の総平均で表した。総平均での変化量を見ると、全体で+0.10、インタ参加で+0.35、インタ不参加で-0.10

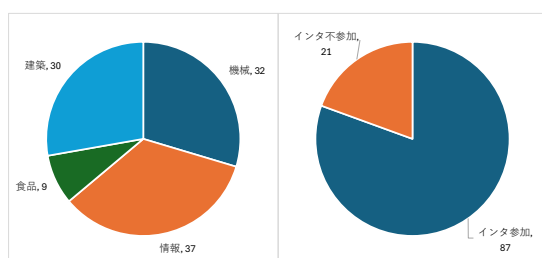


図 1 PROG テスト受験者の内訳

^{※1} 新潟工科大学工学部工学科

表1 コンピテンシーの調査結果

上段：1年 下段：3年	人数	対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力			総平均
		親和力	協働力	統率力	感情 制御力	自信 創出力	行動 持続力	課題 発見力	計画 立案力	実践力	
全体	108	2.96	3.12	2.46	2.87	3.00	3.03	3.56	3.31	3.67	3.11
		3.18	2.94	2.59	3.17	3.33	3.06	3.69	3.24	3.69	3.21
インタ参加	87	2.93	3.10	2.34	2.79	2.92	2.94	3.45	3.37	3.63	3.05
		3.16	2.94	2.62	3.14	3.31	3.06	3.62	3.31	3.67	3.20
インタ不参加	21	3.10	3.19	2.95	3.19	3.33	3.38	4.00	3.05	3.81	3.33
		3.24	2.90	2.48	3.24	2.90	2.48	3.95	2.95	3.81	3.23
インタ+地域	16	3.06	3.44	2.19	2.81	2.69	2.88	3.63	3.19	3.50	3.04
		3.50	3.75	3.00	3.31	3.50	3.50	4.13	3.44	4.00	3.57
インタ+学友	8	3.75	4.13	2.75	2.88	3.88	3.50	4.13	3.75	4.38	3.68
		4.63	4.38	4.00	3.50	5.38	3.88	4.13	4.13	4.75	4.31

であった。残念ながらインタ不参加のグループはマイナス側の評価である。

またインタ+地域、インタ+学友のグループは、これらに比べて大きな変化量を示している。インタ+地域は具体的に対人基礎力の3項目の平均で+0.52, 対自分基礎力で+0.65, 対課題基礎力では+0.42であり、総平均の9項目では+0.53である。一方、インタ+学友は各々+0.79, +0.83, +0.25であり、総平均では+0.62であった。

3年次インターンシップに参加して、且つ、それに付随する事前学習的な地域産業探究に参加、あるいは日常的に对外向けの活動に参加しているグループは非常にコンピテンシーの数値が伸長している。

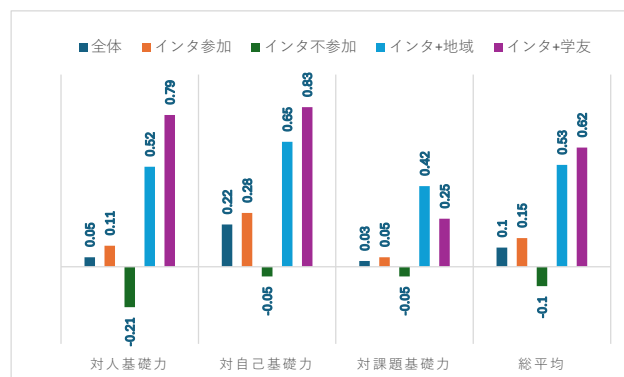


図2 コンピテンシーの変化量

これらの変化量について対応のあるt検定を行い、p値を算出することで有意性について検証する。p値の算出結果を表2に示す。5つのグループ群で対人基礎力、対自分基礎力、対課題基礎力の各3項目の平均と、総平均の9項目でp値算出を行い、このうち有意性があるとみなすことが出来る0.05以下の数値を示した。

有意性に関しては、インタ+地域のグループで良い数値を示した。対人基礎力は0.027, 対自己基礎力は0.016, 総平均でも0.008である。他のグループ群では、

全体とインタ参加の対自己基礎力で0.05以下を示した。

変化量ではインタ+学友が良い数値を示したが、有意性の観点からは良好とは言えない。このグループは8名であるが、変化量がプラス側で大きい1人とマイナス側の3人が混在して0.62の総平均を示したが、バラツキが大きくて標準偏差としては1.30である。一方、インタ+地域のグループは16名の内、マイナス側が2人であり、それ以外はプラス側であり総平均の標準偏差は0.70であった。バラツキの小さいことが顕著であり、その成果からp値の有意性が認められたものと推測できる。他のグループ群も総平均の標準偏差が0.90程度であり有意性に影響すると考えられる。

表2 p値の算出

	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	総平均
全体	-	0.041	-	-
インタ参加	-	0.017	-	-
インタ不参加	-	-	-	-
インタ+地域	0.027	0.016	-	0.008
インタ+学友	-	-	-	-

4. おわりに

インターンシップ参加によるグループ分けで、コンピテンシーの変化量を調べた結果は以下の通りである。

- 1) インターンシップに参加、且つ、事前学習的な地域産業探究に参加、あるいは日常的に对外向けの活動に参加するグループは変化量が良好である。
- 2) 参加グループの変化量のバラツキが小さい場合に有意性が発揮される。

注および参考文献

- 1) 五十嵐賢次他, 「インターンシップ参加によるコンピテンシーの伸長調査—参加グループによる比較—」, 2025年度工学教育研究講演会講演論文集, p.p.296-297